

館林キリスト教会 デボーションノート（2008年）

12月 1日 今日の通読箇所 ヨハネの第一の手紙 3章16～24
「兄弟のために」

ここに厳粛な教えが記されています。「兄弟のためにいのちを捨てるべきである」という教えにたじろがない人がいるのでしょうか。私たちは自分の弱さのために、この教えに忠実に生きる難しさを抱えています。いいえ、できない可能性のほうが格段に大きいと思います。神様のあわれみによって、少しでも御心に従って、与えられた人生を全うしたいと願うのですが。しかし、我が子を愛するお母さんお父さん方は、日々このように生きていらっしゃるのだと思います。日々、自分のいのちを削るようにして、我が子を育てておられるのです。そしてわたしたちも、まだ救われていない人々のために、救いに導かれつつある方々、悩みを抱え疲れている方々のために、日々の信仰生活、教会生活、ご奉仕と証し、祈りと親切な言葉や行いによって仕えたいと願われます。

12月 2日 今日の通読箇所 ヨハネの第一の手紙 4章1～6
「イエスは主なり」

信仰の熱心さは、しばしば慎重さと知性とを無視する恐れがあり、熱狂的になりやすくなる傾向があります。パウロは「彼らが神に対して熱心であることはあかしするが、その熱心は深い知識によるものではない」(ローマ10:2)と間違った教えの熱心に対して警告しています。初代教会は、聖霊の働きの活発な時代でしたが、同時に深い聖書の知識によらない熱狂的な信仰に悩まされた時代でした。そしてサタンは、今も熱狂的、神秘的な信仰を看板にして人々を惑わしているのです。そこでヨハネは、正しい霊の人とそうでない人を見分けるには、「イエス・キリストが肉体をとってこられたことを告白する霊」(2節)を持っているか否かを見るように教えたのです。パウロが「聖霊によらなければ、だれも『イエスは主である』ということとはできない」と教えたのも同様です。

12月 3日 今日の通読箇所 ヨハネの第一の手紙 4章7～12
「神の愛の源泉」

著者ヨハネは、ここで兄弟愛の根拠として愛について語っています。7節に書いてありますように「愛は、神から出たもの」です。あらゆる愛の源は、愛なる神様です。神様の愛は、ギリシャ語でアガペーといいます。自分を犠牲にし、愛するに価しない者を愛する愛です。これは人間の世界には存在しない報いを求めない愛です。その具体的な神様の愛のわざが、9節に書いてある「神はそ

のひとり子<イエス：キリスト>を世につかわし」てくださったということなのです。ある人は「人の愛は神ご自身の反映である」と言っています。ですからクリスチャンが愛を実践する時、自分の中に聖霊様の臨在による神様の助けを感じるのです。人間の力では、イエス様の犠牲的な愛はとても実行できません。それを可能にしてくださるのは、神様を信じる者の中に働きかける神の力なのです。

12月 4日 今日の通読箇所 ヨハネの第一の手紙 4章13～21
「神と人への愛」

「イエスを神の子と告白すれば、神はその人のうちにいまし、その人は神のうちにいるのである」(15節)。イエス様への信仰は私たちと神様を深く結び、神様が常に共にいてくださるという幸福に入れてくださいます。その人は神様の愛を信じて歩みます。「神は愛である」(16節)、8節にも記されたこの短いおことばは、私たちにとってどんなに大きな救いでしょうか。たといどんなことがあっても、神様は愛なる方であり、私たちを愛し続けていてくださるのです。たとい悲しみの嵐に遭遇しても、愛なる神様を信じて歩むなら幸福です。迷ったときも、私たちを愛し続けていてくださる神様を愛して、お喜び頂ける道を生きていけば安心で、幸福です。そして、神様が私たちに求めておられることは、主にあって互いに愛し、助け合うことです。「この戒めを、わたしたちは神から授かっている」と21節にはあります。

12月 5日 今日の通読箇所 ヨハネの第一の手紙 5章1～5
「勝利の力」

「神を愛するとは、すなわち、その戒めを守ることである」(3節)。イエスさまは「わたしは、新しいいましめをあなたがたに与える、互に愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互に愛し合いなさい」(ヨハネ福音書13章34節)と教えてくださいました。ヨハネはこのお言葉、イエスさまのお姿を思い起していたことでしょう。「世に勝つ者はだれか。イエスを神の子と信じる者ではないか」(5節)。これは主にある者への現在から未来にかかわる勝利の約束のお言葉です。パウロは「わたしたちは...死にかかっているようであるが、見よ、生きており、...悲しんでいるようであるが、常に喜んでおり、貧しいようであるが、多くの人を富ませ、何も持たないようであるが、すべての物を持っている」(コリント第二、6章9、10節)と記しています。

12月 6日 今日の通読箇所 ヨハネの第一の手紙 5章6～12

「水と血による証」

ヨハネは6節の冒頭で、イエス様の歴史的事実を、イエス様の御生涯のうちに極めて重要な二つの出来事に要約し、象徴して、「このイエス・キリストは、水と血とをとおってこられたかたである」(6節)と書いています。ここで「水によって」という言葉が象徴しているのは、洗礼のことです。この時、神様は「これはわたしの愛する子」と宣言されました。こうしてイエス様が神の御子キリストと証されたのです。また「血によって」という言葉が象徴していることは、十字架の上での死のことです。イエス様は十字架にかかって死ぬことによって、購い主としての務めを成し遂げられ、ご自身がキリストであることを証されたのです。そしてこの二つの歴史的事実を私たちの心に絶えずあかし続け、わからせてくださるのは聖霊様なのです。

12月 7日 今日の通読箇所 ヨハネの第一の手紙 5章13～21

「三つの確信」

ここには神の子が持つべき三つの確信が書いてあります。第一の確信は、永遠のいのちを持っているという確信です。13節の「神の子の御名を信じる者」とは、クリスチャンのことです。著者の目的は、彼らに「永遠のいのちをもっていること」を悟らせることです。即ち、永遠のいのちを持っているという事実で確信を持ち、その上で「世に勝つ」(4節)歩みをしてもらいたいのです。第二の確信は、祈りの確信です。神様が私たちの祈りに耳を傾けて聞いてくださるといふ確信です。そしてただ自分のためにのみ祈るだけでなく、兄弟のためにとりなしの祈りを勧めているのです。第三の確信は、自分は神のものであるという確信です。自分が神によって生まれ、神から出たものであるという確信こそ、罪に対する勝利の原動力だからです。

12月 8日 今日の通読箇所 イザヤ書 40章1～11

「ママ会員の活躍」

「主は牧者のようにその群れを養い、かいなに小羊をいだし、ふところに入れて携えゆき、乳を飲ませているものをやさしく導かれる(11節)」子供を連れてお母さん方が奉仕のために教会に見えられる。牧師夫妻がその子供の面倒を見ていると「かえってご迷惑ではないですか」とよく言われた。その時牧師は、たびたびこのみことばから、乳飲み子を抱えたお母さんがほかの人と同じに奉仕に預かるのは、聖書的なことで、牧師がそれを助けるのもまた聖書的なことだとお話した。結婚して子供のできたママ会員が、教会の奉仕の戦列から外れないで、なかなか積極的に活躍しているのは、教会の誇りだ。

12月 9日 今日の通読箇所 イザヤ書 40章12～26

「文章読本」

わたしは若い伝道者に「説教の訓練にイザヤ書を朗読するといい」と勧めます。イザヤはここで神様のことを話すのに「非常に」とか「絶大に」とか、なまな、抽象的な副詞を使いません。具体的で、生き生きした、目に見えるような描写力で神様のことを、天地の支配者、偶像との対比、空しい人間との対比というように、語ってゆきます。なんとすばらしい文章でしょう。我々の口調が、こういう文体に慣れてきたら凄いなと思います。朗読を勧めるゆえんです。聖書は最高の説教教科書で、また最高の文章読本です。せつせと読まねば損ですよ。

12月10日 今日の通読箇所 イザヤ書 40章27～31

「休養、娯楽」

「主を待ち望む者は新たなる力を得る」は、英語で「リクリエーション」と訳される言葉だ。これは普通「休養、娯楽」などの意味に使われる。コンピューターなどにインプットしてある情報や指示を消去するのも、クリアーという。いま祈りをもって神を待ち望む者は、疲労、倦怠、マンネリなどをクリアーされて、静かに休息することができる。そして心気澁刺、再び新鮮な命と心に甦ることができる。これはそういう約束だ。世的な娯楽は、しばしば安逸や脱線の機会になる。「主を待ち望む」のは、最も健全で、しかも、最も本質的なリクリエーションなのはすばらしいことである。

12月11日 今日の通読箇所 イザヤ書 41章1～7

「工事現場」

「彼等はおのおのその隣を助け、兄弟たちにいう『勇気を出せよ』と。細工人、鍛冶屋、はんだづけする者、釘を打つ者もお互いに『よくできた』と励まし合う」なかなか良い空気で工事が進んでいるようだ。幕屋、神殿の建築の様子も思われる。今日は教会総会だ。教会もまた一つの建築現場だ。今日もお互いに勇気をつけあい、奉仕を励ましあいたいものだ。「神から賜わった恵みによって、私は、建築師のように土台を据えた。他の人がその上に建てるのである。しかしどういうふうに建てるか気をつけるがよい」と使徒パウロもいっている。

12月12日 今日の通読箇所 イザヤ書 41章8～16

「主のお約束」

主は、語りたもうたお約束を変えず、お選びになった民を、よし怒り罰することがあっても、見捨てない。二千年の間罰を受けて世界に放浪した、神の選民ユダヤ民族が、徹底的な迫害にも滅亡せず、散らされていた130近い国々から

集められて再び国を成した事実はそれを物語っている。我々も、その信仰生活において、間違いも失敗も多かった。それゆえ同じく「われらの滅びざるは主の寛容による」のである。また、「私達は不真実であっても、彼は絶えず真実である」とあるとおりだ。「主なる神は言う『恐れてはならない。わたしはあなたを助ける』と」ありがたいことだ。

12月13日 今日に通読箇所 イザヤ書 41章17～24
「救いの水」

日本は「豊葦原の水穂の国」などといわれるくらいで、至るところ植物が満ちて美しい。それが砂漠の国にゆくと、水がないために荒涼として、花も咲かず鳥も歌わず、本当に淋しい景色だ。それは神の祝福を失った人間の心と生活そのままだ。反対に神の救いと祝福は水に例えられる。キリストは「私の与える水を飲むものは永遠に渴かない」と言われたが、ここには同じ真理が、もっと目に見えるように、詩的に、美しく語られている。砂漠に救いの水が湧いて、自由に飲める。洗面、洗濯もできて、きれいになる。立派な植物も生い茂るのだ。

12月14日 今日に通読箇所 イザヤ書 42章1～9
「傷ついた葦」

イザヤ書は、救い主の預言に満ちている。キリスト自身もそれを自覚していて、たとえばこの章の預言は、マタイ11章に、12章に、ご自身が救い主である証明として引用しておられる。ことに[2節]以下のみことばは尊い。我々は最近選挙運動の、町中になり響く、身も世もあらぬ叫び声を聞いた。また戦後のイラクで、相も変わらぬフセインが、抵抗するクルド人やシーア派を虐殺するのを見た。キリストには、大声を町中にあげることはなく、また力づくの強制もない。そして折れ葦のような無価値なもの、ほのぐらい灯心のような弱いものも見捨てず、やさしく丁寧に、救いと生涯の完成に、導いて下さるのだ。

12月15日 今日に通読箇所 イザヤ書 42章10～17
「新しい歌」

考えてみると我々には歌がなかった。涙、別れ、雨。そういう言葉が古今集以来現代の歌謡曲に至るまで、日本の歌の最多用語だそう。カラオケなどでも、そういう寂しい歌が好まれるそう。歌謡曲で明るくなり、希望を歌っても、不自然でそらぞらしくて気が乗らない。やはり嘆き節になってゆく。これが人間生活の基調で自然な心情なのだから仕方がない。しかし我々はクリスチャンになって歌が変わった。つまり新しい歌を歌うようになったのだ。クリスチャ

ンにとっても、人生はきびしい。しかし我々の歌はつづやき嘆きに終わらない。信仰と祈りの告白があり、神に向う、感謝と喜びの声があるのだ。

12月16日 今日に通読箇所 イザヤ書 42章18～25

「神の嘆き」

たびたび学んできたように、イスラエルの滅亡は、彼等の罪が神の裁きを招いたからだ。いったい真心からする忠告が聞き入れられないほど、もどかしく残念なことはない。そしてその結果が現れて、みるみるうちにその人が駄目になってゆくようなことがあれば、悔しいとも悲しいとも言い様がないだろう。ここに書かれた神の嘆きがそれだ。繰り返し示される神の警告も、本当の預言者がいないため、イスラエルには届かない。また語っても彼等は聞き入れない。その滅亡は必至になりつつある。いったい世に、かくも愚かな盲人聾啞者があるのかと、神はなげかれる。

12月17日 今日に通読箇所 イザヤ書 43章1～7

「裁きと許しと回復」

神は罪を犯したイスラエルに対して厳しかった。バビロンに滅ぼされただけでなく、AD70年にはローマの総攻撃を受けて滅亡し、亡国の民として、侮辱と迫害の二千年を経験した。しかし「神の慈愛と峻厳とを見よ」のお言葉のとおり、神はその民を最後的には見捨てず、許し回復してくださるのは、現在のイスラエルの再建国の歴史を見ても明らかだ。この章はその預言ともとれる。今朝は礼拝でダビテ王の失敗と神のあわれみによる回復を学ぶ。ダビデもその謙遜な素直な悔い改めによって、恐ろしい罪を許されたのだった。真に「主の寛容こそわれらの救い」だ。

12月18日 今日に通読箇所 イザヤ書 43章8～13

「神の証人」

イスラエルは時々「目しい」「耳しい」のようになって、神様を悲しませたが、それでも選ばれた神の証人であることに違いない。ここに「わたしは神である」「あなたがたはわが証人である」と書かれているのはその意味だ。神は自らご自身を示し、自らその栄光をお現しになるが、しかし神を信ずる人が用いられ神を証し、神の栄光を現すのを期待しお喜びになる。イスラエルもそのために立てられ、われわれにもそのことが求められているのは何と光栄ではないか。パウロも「飲むにも食べるにも何事をするにも、すべて神の栄光のためにすべきである」と言っている。

12月19日 今日の通読箇所 イザヤ書 43章14～21

「新しい信仰」

マンネリズムは困り物だ。まして「敗北感」「どうせ駄目だ」式の、癖になった思い込みは困る。亡国を繰り返したイスラエルがこういう敗北感の虜となったのは無理もない。しかし[18節]以下に神は言われる。「済んでしまった先のことを思い出すな、見よ神は新しいことを成される」と。我々も自分の無力、失敗に心を奪われ、大胆に神を信ずることができなくなりやすい。しかし失敗を積み重ねたイスラエルに対してさえ神は激励の言葉をおかけになるのだ。罪は悔い改めよう。失敗は反省しよう。しかし我々は敗北感を払い捨てて、新しい信仰と勇気を奮い起こそう。これこそ常に、神の望みたもうことなのだ。

12月20日 今日の通読箇所 イザヤ書 44章6～20

「偶像礼拝」

日本は昔から「八百万(やおよろず)の神」などといって典型的な多神教の国だ。しかも後から後からいくらでも新宗教が誕生する。日本人は大体あらゆる宗教と万遍なく付き合うようだ。これは実は、ボーイフレンドが沢山いて、結婚相手がいないのと同じで、本当の宗教心を持っていないのだ。イザヤのこの章を読めば、子供でも偶像礼拝の愚かさが分かる。しかるに賢明をもって世界に聞こえた日本人が、いつまでも偶像と付き合う気持ちは本当に不可解だ。我々はこれを真剣に悲しみ、祈りつつ伝道に励もう。神の光が心を照らし、彼等が真の神に立ち返る為に。

12月21日 今日の通読箇所 イザヤ書 44章21～28

「神の招き」

「わたしはあなたのとがを雲のように吹き払い、あなたの罪を霧のように消した。わたしに立ち返れ、わたしはあなたをあがなったから」とは、何という恵み深い神の招きだろう。神は人の罪を最終的にとがめず、キリストの十字架によって許してくださった。そしてこのように全世界に向かい、愛の招きを呼びかけていらっしゃるのだ。総ての人はこの招きを受け入れ、従わなければならない。また総てのクリスチャンは、伝道をもって、この神の招きを人々に伝えなければならないのだ。

12月22日 今日の通読箇所 イザヤ書 45章1～8

「クロス大王」

イスラエル人はバビロンに捕囚となって70年を経過した後、そのバビロンを攻め滅ぼして、新しく世界の支配者になったペルシヤのクロス王によって捕囚か

ら解放され帰国することができた。これはイザヤの預言から 130 年も後のことだ。イザヤの預言の現時点では、イスラエルはまだ捕囚にもならないし、もちろんクロス王もいない。イザヤがまだ出現しない人物をかくも明らかに、個人名をあげて預言したのは不思議としか言い様がない。しかし同じく彼は主イエスのことも明らかに預言した。一方の預言ができたのなら、もう一方も、できないはずがないのだ。

12月23日 今日に通読箇所 イザヤ書 45章18～25

「仰ぎ望む」

「地の果てなるもろもろの人よ。わたしを仰ぎ望め、そうすれば救われる」とは何という尊いお約束であろうか。私は重い病床にある方などに、このお言葉を語り、あるいは色紙などに書いてあげたのは何人だか知れない。そしてこのみ言葉によって何人が慰められ、あるいは救われたか知れない。心身がいちじるしく衰弱すれば、あるいは考え、あるいは理解する力も衰えよう。しかし困惑した目を上げて、主を仰ぎ望むことはできるのだ。そこに言葉にならない祈りをこめることはできるのだ。それとともに、理解力のある間にキリストの救いを教えられ、知っていることが、いかに大切であるかと思うのだ。

12月24日 今日に通読箇所 イザヤ書 46章1～13

「白髪になるまで」

ロマ書に「神の賜物と召しとは変えられることがない」とあるがここに「生まれ出た時から私に負われた者よ。私はあなたがたの年老いるまで変らず、白髪になるまで、あなたがたを持ち運ぶ」とあるのも同じ意味だろう。万事は推移して留まらない。人間は年をとる。境遇も人間関係も変わる。社会情勢も変わる。ことに今は古いものが迅速に過ぎ去る社会で、会社でも家庭でも、対応しきれない先輩や老人が、早々と不要品扱いされる時代だ。しかし変わることはない主が、人生のあらゆる場面で共にいて下さるのはすばらしい。主は変らず常に、助け導いて下さるのだ。

12月25日 今日に通読箇所 イザヤ書 47章1～11

「豊かさの責任」

罪にふけたイスラエルが、神の裁きを受けるのはみ心だった。その裁きのためにバビロン帝国が用いられたのも事実だ。ではバビロンはイスラエルに比べて、神の祝福を受ける価値のあるりっぱな国だったのか。決してそうではない。彼等はたまたま神に用いられた鞭に過ぎないのだ。高ぶり誇り、図に乗って、必要以上にイスラエルを虐待することは許されない。ところが彼等はそれをし

た。やがて神の裁きはバビロンに望むのだ。いま日本は富み栄え贅沢に耽っている。苦しむ国を見下げている。しかし神はこれを見ておられる。豊かさについて真の神に感謝し、豊かさの責任を全うしているかどうか。

12月26日 今日に通読箇所 イザヤ書 48章1～11

「み名の栄光」

主の名をもって選民と称されたイスラエルが、あるいは裁かれて亡び、あるいはあわれみを受けて回復する。これは歴史の神秘とも言える。ある牧師がその仕える王の「神が生きているという客観的な証拠があるか」という質問に対して「サー、ジュー」(ユダヤ人でございます)といったのは有名な話だ。ここにはそれらはすべて神のみ言葉に基づく神の業であって、このことを運命とか、力関係とか、偶像とか、他のものに帰することはできないし、許されない、ということが語られている。イスラエルに対するあわれみも、ただご自身の栄光を守る、神自らのみ心なのだ。

12月27日 今日に通読箇所 イザヤ書 48章12～22

「利益と幸福」

「わたしはあなたの神、主である。わたしはあなたの利益のためにあなたを教え、あなたを導いて、その行くべき道に行かせる」[17節]とあるように、神様はいつも私達を祝福し、私達に益であるように導いて下さるのだ。それはエレミヤが「主がこう言われる『私があなたに対して抱いている計画は私が知っている。それは災いを与えようというのではなく、平安を与えようとするものであり、将来を与え、希望を与えようとするものである』」と言っているのと同じだ。神に従うことは最高に安全であり幸福なのだ。私達は改めて神の愛と真実を知り、生涯主に従って行こう。

12月28日 今日に通読箇所 イザヤ書 49章1～7

「剣と矢」

ここに「主に選ばれた者、主に愛される者」の光栄と喜びが歌われている。「あなたはわがしもべ。わが栄光をあらわすべきイスラエルである」とは何という尊い呼びかけであろうか。神は我々を「み手の中にある鋭利な剣、研ぎ澄ました矢」といわれる。つまり悪魔と戦って勝ち、多くの人を悪魔の手から解放する、神の救いの武器として、我々を期待していらっしゃるのだ。弱い無価値の自分を見れば、憶病になるが、どんな剣もどんな矢も、名人の手にかかれば役に立つ。それを信じ期待し、今日の受洗者も神様に用いて頂きましょう。

12月29日 今日の通読箇所 イザヤ書 49章8～21

「救いの安全」

「わたしはあなたを忘れることはない。見よ、わたしはたなごごろ(手のひら)にあなたを彫り刻んだ」ここはなんとという慰めに満ちた章だろうか。神学で「救いの安全」が、美しい言葉で繰り返し教えられている。一度明確な救いを経験した者は、多少の出入りがあっても、決して失われることなく、結局神のご責任のもとにその救いを完成させることができるというお約束だ。救われたものもその栄光の日まで、困難と誘惑の多い世の荒波にさらされる。危険なこともあり、不信仰に陥ることもある。しかし我々の救いは安全なのだ。

12月30日 今日の通読箇所 イザヤ書 50章1～9

「耳と舌」

[4節]に「教えを受けた者の舌と耳が与えられた」と言われている。与えられたその耳があればこそ、我々は朝早く「神の言葉を聞く」ことができるのだ。また「ことばをもって疲れたものを助ける」こともできるのだ。キリストも「わたしが暗闇であなたに話すことを、明るみで言え。耳にささやかれたことを、屋根の上で言い広めよ」と教えた。耳と舌、聞くことと伝えること、祈りと奉仕は、いつも両立している。我々は選ばれた主の僕として、この特権を与えられていることを感謝したい。

12月31日 今日の通読箇所 イザヤ書 51章1～8

「切り出された岩」

私は田舎町の金物屋の長男として生まれた。貧しくはなくても教育なぞに熱意のない商人の家庭だった。途中で家が破産したので、私は毎日自転車で遠い山村に出かけて行って金物の行商をした。商人は性分に合わなかったが、高い教育は受けなかったし、境遇から脱却はできず、年少にして世をはかなんでいた。私はクリスチャンになってあらゆる面で救われたのだ。長年牧師の奉仕が許されたのは何という感謝だろう。こういう恵みは総てのクリスチャンの体験だと思う。「あなたがたの切り出された岩と、掘り出された穴とを思い見よ」は本当に感謝のお言葉なのだ。